なぜ「神」はあらわれないのか

――『告白録』冒頭箇所といわゆる「自伝的部分」との関係をふまえて――

荒井洋一

かつて、山田晶先生が北白川教会において講話をなさり（『アウグスティヌス講話』新地書房、一九八六年、講談社学術文庫、一九九五年）、そして現在も、加藤武先生が井草教会において『告白録』の読書会をなさっていることが思い起こされるが、このたび、加藤信朗先生は松原教会において講義をなさったとのこと。そこには専門家と非専門家が集っていたことであろう。同じ一つの世界で、同じ一つの信仰に生きる者（uiuentes）としての共通性のもとに。けだし『告白録』の真髄に迫るためには、最もふさわしい場所の一つではないだろうか。（以下、敬称を略す）。しばしば、ラテン語の用語や原文までも参加者に示し、その新たな訳語までも示した上で、徹底的に厳密に、また深く深く掘り下げて、『告白録』の真髄に迫ろうとする志向性ははっきりとしているように見える。

参照、「回心は信仰共同体のうちに共同にもたれる……」（二一八頁。以下では、本書の場合、書名を記さずに、頁数のみを記す）。

そこで、私は、まず、生（uita）の視点から切り込んでみたい。

「（自分が）生きていること」はアウグスティヌスの思索の出発点でした」（一八六頁）。

『告白録』における uita の年代区分は下記のようである。

(1) 『告白録』一・六・七：幼年時代（infantia）
(2) 『告白録』一・八・一三：少年時代（pueritia）
(3) 『告白録』二・一・一：青年時代（adulescentia）
(4) 『告白録』七・一・一：壮年時代（iuuentus）

不思議なことに、それぞれの年代の始まるところでは、いずれも印象深い、意味深い言葉が書き残されている。私たちがそれらを読み返すとき、決して、川の流れのような連続的なイメージを思い浮かべることはできない。そこでは先の年代と後の年代との接合部分に焦点が合わされていて、むしろ、各年代は切断されているかのように見えないだろうか。少なくとも、これらの言葉の数々は、ともすれば川の流れのイメージに流されがちな現代に生きる私たちに対して、鋭い警告を与える役割を担っているように思う。

(3) 二・一・一については、加藤信朗により原文も含めて引用された上で、次のようにコメントされている。

「この部分は非常に美しいラテン語で、しかも肺腑をえぐるとでもいえる激しい言葉で書かれています」（一〇三頁）。

(1) 一・六・七

ここで、思い起こされるのは、アウグスティヌスの生がまさに始まろうとする出発点において、「私は」を主語とする、原初の問いかけである。

「私は私がどこからここに来たのか（unde uenerim huc）を知りません」（一・六・七）。そして、その「ここに」huc を言い換えて、アウグスティヌスはこう言う。

「死せる生（uita mortalis）に、と言うべきでしょうか。それとも、生ける死（mors uitalis）に、と言うべきでしょうか」。

この表現の意味については、本書の八〇―八一頁によって教えられる。

そしてまた、この表現と共に、印象深く思い起こされるのは、次の表現である。

「そして、まあ、どうでしょう。私の幼年時代はとっくの昔に死んでしまった（mortua est）のに、しかも私は生きている。けれども主よ、あなたはいつも生きたまい、

あなたのうちにあっては何ものも死にません」Et ecce infantia mea olim mortua est et ego uiuo. Tu autem, domine, qui et semper uiuis et nihil moritur in te,…（一・六・九、山田晶訳）。

ここでは、普段は要らないはずのラテン語の主語、ego と tu とが、はっきりと対照させるために、用いられている。

「私は」を主語とする「私は私がどこからここに来たのかを知りません」と並んで、ここでの重要な言葉は、「あなたは」を主語とする「あなたはわたしをこの父親から、この母親において、時間の中にお造りになりました（ex quo et in qua me formasti in tempore）」（一・六・七、八二頁）であろう。

(4) 七・一・一

この「とっくの昔に死んでしまった」mortua est については、『告白録』七・一・一：壮年時代（iuuentus）の初めのところでも、次のように言われている。

「邪悪な青年時代はすでに過ぎ去り（mortua erat）、私は壮年時代にはいってゆきました」Iam mortua erat adulescentia mea mala et nefanda, et ibam in iuuentutem,…（山田晶訳）。

二箇所の山田晶訳を比べると、後の訳の方がより一層穏やかであり、今日の私たちの用法にもかなう表現であるが、先の訳の方がより一層 radical であり、今日の私たちの用法に照らすと、違和感を覚えさせる表現である、と言えよう。

(2) 一・八・一三

「私が幼年時代から離れて、ここへと進んで（huc pergens）、この少年時代へとやって来た（ueni in pueritiam）のではないでしょうか。それともむしろ、少年時代そのものが、私へとやって来て、幼年時代の後を引き継いだのでしょうか。けれども、幼年時代も退去したわけではありません。一体、どこに立ち去る場所がありましょう。そして、それにもかかわらず、それは、もう在りませんでした」。

ここでの「ここへと（huc）」は (1) での「ここへと（huc）」を強く連想させる。

さて、『告白録』冒頭箇所を読み解くことによって、幼

年時代から書き始められていく、いわゆる自伝的部分との関係が見えてこないだろうか。

冒頭箇所にこそ、すべての謎を解く鍵が隠されているのではないだろうか。

これは、まさに当初から冒頭箇所を重視して、注意深い洞察のまなざしを向けてきた加藤信朗から教えられた方法である。

「アウグスティヌスの書物の各巻の冒頭は非常に彫琢された文体で書かれていて、そこから始まる巻の全体を要約するような形で書かれています」（一〇三頁）。

加藤信朗の方法により影響を受けて、私たちは、つい、『告白録』冒頭箇所に記された重要用語の響きを第九巻においても探してしまう。

たとえば、「私たちの心」cor nostrum（参照、本論考一一三頁）については、『告白録』九・二・三においてもはっきりと、しかも、きわめて重要な証言の中で聞こえる。

「あなたは私たちの心を、愛の矢で貫かれました。そこで私たちは、はらわたにつきささったあなたの言葉を身に帯びました」。（この「私たち」の意味については、二三二頁において明瞭に説明されている）。

また、「我は汝の救いなり」salus tua ego sum（『詩篇』三四・三。参照、本論考一一五頁）については、『告白録』冒頭箇所の、ほとんど一体となって聞こえてくる二例を除くと、唯一、九・一・一に聞こえるのみである。

この使用例の少なさに照らしてみると、『告白録』冒頭箇所と九・一・一とが、或る仕方で、緊密に照応し、呼応しているのではないかと推測されてくる。

「本巻（＝第九巻）には不思議な静けさと荘重の気がみなぎっています。……本巻全体は神のもとにある自分のあり方を述べた第一巻から始まり、彷徨の過程を経て、神の憐れみの業が自己においてどのように実現されたかを述べる自伝的部分を結ぶのにふさわしいものです」（二二二頁）。

この『詩篇』三四・三と他の『詩篇』とが「溶鉱炉の中に入れられたように溶融され」、結び付けられて、引用されていくアウグスティヌスの方法については、二二七―二二八頁に見事に説明されている。

私は、加藤信朗の段落分けから大いに教えられつつ、かつて拙著『アウグスティヌスの探求構造』創文社、一九九七年の中で行った、主語に注目する視点からも四六頁から

五〇頁を眺めてみよう。

すると、「あなた」と「私」との生き生きとした対話的な構造が浮かび上がってくるように思う。

ここでは、ひとまず、水平的な川の流れのイメージについては、その片鱗も見えないと言えると思う。

ただ視界に映るのは、「あなた」と「私」「私たち」との垂直的な、対話的、応答的な関係のみである。

もちろん、そこに時間性がないとまでは言えないだろう。

現に、ここでは、動詞の現在形（magnus es）も、現在完了形（fecisti nos ad te）も、未来形（et laudabunt dominum）も、また接続法現在（quaeram te, domine）も用いられているのであるから。

（そしてまた、実際に、『告白録』第一一巻では時間論が展開されてもいる）。

けれども、それらを通じて言おうとされていることは、「あなた」へと向かう「私」や「私たち」の根本的な方向性であり、運動性ではないだろうか。そしてまた、そのような方向性や運動性の根底に潜む、「あなた」からの「私」や「私たち」への働きかけではないだろうか。

加藤信朗によるきわめて重要な問題提起のうちの一つは、私たちにとっては、実に、意外なことに、第一段落から第四段落を通じて、『告白録』の中でも最重要の用語のはずの「一般名詞」：「神」はまだ使われていない、という点である。

「「神」deus という言葉が出てきていないのは、驚くべきことだと思います」（三五頁）。

これはなぜだろう。

「神」はなぜ第一巻第一章では用いられないのか。

このたびの私の特定質問はこの問いに尽きる。「神」はなぜ第一巻第一章ではあらわれないのか。それは、ただ単に「神」という名を言い表すことへの宗教的な畏れから由来するものなのか。

特に、第二段落の「人」との関係において、特定質問者としての私見も提示してみる。

「人」は用いられているのに、なぜ「神」は用いられないのか。

「神」はなぜ第一巻第一章ではあらわれないのか、との問いを、裏から言うと、「あなた」はなぜ第一巻第一章であらわれるのか、との問いになる。そしてまた、同じくら

いに重要な問いとして、「私」はなぜ第一巻第一章であらわれるのか、との問いにもなる。

第一段落（宗教の段落）では、「あなたは」「あなたの力は」が主語である。

けれども、そのように語り出すのは「私」か「私たち」であろう。加藤信朗は「私」と見ている（六二頁）。

第二段落（神学の段落）では、まず、「人間は」が主語になり、ついで、「あなたは」「わたしたちの心は」が主語になる。（「わたしたちの心は」が主語になる前に、一人称複数形対格「私たちを」nos が用いられている。「あなたはわたしたちをあなたに向けて造られたからです」）。

「人間は」が主語になるところでは、なぜ、「私は」かまたは「私たちは」が主語にならなかったのだろう。――加藤信朗は「人間は」＝「私は」と見ている（五二頁）。

それは、この段落においては、「被造物」creatura や「死性」mortalitas や「罪」peccatum などの、「神学的な」用語が用いられることに関係しているのかもしれない。

この「人間」は「一般語」（五二頁）であるのだから、暗黙のうちに、「一般名詞」：「神」もまた顔をのぞかせているのだろうか。

けれども、テキストでは、決して「人間は神を（deum）讃めたたえることを奥底で求めています」とは言われずに、二人称単数形対格（te）を用いて、「人間はあなたを讃めたたえることを奥底で求めています」と言われている。

この、いわばアンバランスはどこから来るものだろう。

「あなたを讃めたたえることを奥底で求めています」と言うなら、主語は「私は」または「私たちは」でなければならないだろう。

また、「人間は讃めたたえることを奥底で求めています」と言うなら、「あなたを」ではなく、「神を讃めたたえることを」でなければならないだろう。

それとも、ここには、第一段落で表明された讃美を支える、対話的な関係それ自体への反省の意図があり、「あなた」と「私」「私たち」とは決して対等な対話的関係にはなく、「私」「私たち」は単なる「人間」に過ぎないと言いたいのであろうか。つまり、対話的な関係それ自体への反省の中で、アウグスティヌスのまなざしは、「私」「私たち」の人間としての在り方に向けられていると言うべきだろう

か。

いや、むしろ、このような人称性の、いわば「ねじれ」は、「私」が出現することができるための、いわば落差を意味しているように見える。「私」は「あなた」と同等の仕方で、最初から対話的な関係にいるわけではなく、「人間」を経て、「私たち」を経て、初めて、少しずつ出現してくるものとして描かれているのではないだろうか。

『告白録』冒頭の、対話的な関係は、実は、その力動性に関しては、「私」の出現へと向かって、展開していくのではないだろうか。

今度は「あなたは」が主語になって、「あなたは、あなたを讃めたたえることが喜びとなるように、駆りたてます」tu excitas, ut laudare te delectet と言われる。ふつう、ラテン語では、excitas と言われただけで、「あなたは駆りたてます」との意味になるので、わざわざ「あなたは」tu と言われていることには強調があるはずである。それゆえ、次のように強く訳してみても良いだろう。すなわち、「あなたを讃めたたえることが喜びとなるようにと駆りたてるのは、あなた自身です」と。

これは、第一段落で表明された讃美が、実は、その根底においては、あなた自身の力に由来するものであると言いたいのであろう。（第四段落を参照すると、「あなた」への「わたしの信仰」も「あなた」が「わたし」に与えたものである）。

そこに有名な言葉が記されている。

「あなたはわたしたちをあなたに向けて造られたからです。ですから、わたしたちの心（cor nostrum）は、あなたの内にあって憩う（requiescat in te）まで、休らうことがありません（inquietum）」。

ここで、inquietum を、いわば現代的に「不安」Unruhe と訳すとしても、それは、わたしたちのあなたへの方向性と運動の中でとらえなければならない。

第三段落（哲学の段落）は問いかけの段落であり、「あなたは」が主語であると見なすことができる。ここでは、初めて、一人称単数形（与格）「私に」mihi が用いられる。決して「人間に」homini ではなく、また「私たちに」nobis でもない。ここに至って、ついに「あなた」との対話者である一人称単数形「私」が初めて明示的に出現するが、それは、まだ一人称単数形主格としてではなく、一

人称単数形与格「私に」mihi としてである。

第四段落（探求と宣教の段落）では、いよいよ、一人称単数形「わたしは」が出現する。「わたしは、主よ、あなたに呼び求めながら、あなたを尋ね求めたい、あなたに信じながら、あなたに呼び求めたい」。

ついで、「わたしの信仰が」fides mea もまた主語になる。「主よ、わたしの信仰があなたに呼び求めています」。けれども「この信仰はあなたがわたしに下さったものです」quam dedisti mihi。

つまり、『告白録』冒頭の構造は、「あなたは」が主語になる第一段落から始まって、「私は」「私の信仰は」が主語になる第四段落で終る、との基本的な方向性を持っている。

第二段落において、「わたしたちの心は」が主語になる前に、一人称複数形対格「私たちを」nos が用いられているように、第四段落において、「私は」が主語になる前に、第三段落において、一人称単数形与格「私に」mihi が用いられている、と言うことに十分な注意を払わなければならない。これは「私」が「あなた」との対話者として出現してくるためのプロセスを示していると見える。

けれども「この信仰はあなたがわたしに下さったものです」。

「第二章ではじめて「神（deus）」と言う語が導入されている……」（六九頁）。

第一章から第二章への展開の模様は加藤信朗により見事に解明されている。

「「大いなるもの」に呼びかけている自分は必然に「小さいもの」です。……そのように「大きいもの」に対して、「小さいもの」である自分が「呼びかけ、呼び求める」ということがどうしてできるのだろうかという疑問がこの章の論究を引き出しています」（六七頁）。

ここでは、「あなたの内にある」in te esse と「わたしの内にある」in me esse との一対の表現に光が当てられる（七三頁）。

ここでの in te に関しては、第二段落の in te が響いているように感じられる。「わたしたちの心（cor nostrum）は、あなたの内にあって（in te）憩うまで、休らうことがありません（inquietum）」。

「第三章では、弁証論的探究はふたたび「容れるもの＝器」と「容れられるもの＝内容」という日常言語のレベルに戻り……」（七四頁）。

「第四章はふたたびこの弁証論的論法のはじめに帰り「では、わたしの神は何なのでしょうか、お願いします、主なる神以外のいったい何なのでしょうか」と問われた後、神を述べるさまざまな相反する限定語が列挙されてゆき、これら相反する限定語の「反対の一致」として神を言い表してゆきます」（七五頁）。

「この弁証論的論法の結論部となるのが第五章です」（七六頁）。

ここでは次の問いかけがなされる。

「だれがあなたの内に安らうことをわたしに与えてくれるのでしょうか（Quis mihi dabit adquiescere in te ?）。……あなたはわたしにとって、いったい、何なのでしょう（Quid mihi es ?）。憐れんでください。そして、わたしに語らせてください。わたし自身があなたにとって何であるかを（Quid tibi sum ipse …?）。……どうぞ、わたしの魂に「われは汝の救いである」Salus tua ego sum.（詩篇三四・三）と仰ってください」。

この第五章は、私の立論にとり、きわめて重要なので、一文ずつ見ていこう。

「だれがあなたの内に安らうことをわたしに与えてくれるのでしょうか（Quis mihi dabit adquiescere in te ?）」。

ここでは、だれしも、第二段落の言葉を思い起こすだろう。「わたしたちの心（cor nostrum）は、あなたの内にあって憩う（requiescat in te）まで、休らうことがありません（inquietum）」。

それは、「あなた」へと向かう「私たちの心」の根本的な方向性と運動性の中で語られる言葉であった。

ここでは、そのような方向性や運動性の根底に潜む、「あなた」からの「私」への働きかけに、再び、焦点が合わされている。それは、第四段落に少し似ている。

「だれが」と問いかけているが、その答えは、明らかに、「あなたが」である。

そこで、「あなた」と「私」との相互関係がクローズアップされてくる。

「大いなる方」（第一段落）である「あなた」と「あなたの造られたもののほんの一部分にしかすぎない人間」（第二段落）である「私」との相互関係とは何であろうか。

それは、一言で言えば、創造主（deus）と被造物（homo）との関係であろうか。

（実際に、『告白録』第一二巻や第一三巻では創造の問題が展開されてもいる）。

それでは、どうして、「人間とは何か」と問わずに、「私とは何か」と問いかけたのだろう。

加藤信朗による訳文の引用を続ける。

「憐れんでください。そして、わたしに語らせてください。わたし自身があなたにとって何であるかを（Quid tibi sum ipse …?）。あなたが私によって愛されるようにお命じになるほどの何であるかを、そして、もしも、わたしがそうしないなら、あなたはわたしにたいしてお怒りになり、計り知れない不幸の数々を下そうとなさるまでの何であるかを。もしも、わたしがあなたを愛さないとしたら、それはわずかなことでしょうか。そんなことがぜひともないように」。

この後には、「あなたはわたしにとって、いったい、何なのでしょう」の問いかけが主導的となり、「あなた」からの答え：「われは汝の救いである」はもう一度繰り返される。

参照、「救いとはある意味で自己が神と一致することです」（二二八頁）。

けれども、少なくとも、ここでは、この答えは最終的な答えではなく、いわば、「あなた」の居場所を示す声である。

引用を続ける。

「そうすれば、わたしはこのあなたのお声（uox）を追って走り、あなたを摑むでしょう」。

ここでは、聞くこと（audire）ではなく、「あなたの顔」facies tua を見ること（uidere）が最終的な目的とされている。

「これは「神秘的な愛」の告白の極地といえるでしょう」（七七頁）。

「「主の顔を見ること」はアウグスティヌスにとって最終の目的でした」（七九頁）。

もしも、このようにして、「あなたはわたしにとって、

いったい、何なのでしょう」の問いかけが一応の終極を見るとしたら、振り子のように思索はめぐらされて、この問いかけと一対の、いや、実は表裏一体のもう一つの問いかけ「わたし自身があなたにとって何であるか」へと、もう一度、問い直されてこないだろうか。

それが一・六・七以下の、いわゆる「自伝的部分」の展開であったように思う。

すなわち、いわゆる「自伝的部分」は「わたし自身があなたにとって何であるか」の問いかけへの答えとして展開されたのではないだろうか。

また愛の問題に帰る。

こうして、加藤信朗によると、『告白録』の告白とは、罪の告白や自己自身の真実の告白、神の憐れみの業の告白、讃美の告白を意味する（八―九頁）ばかりでなく、究極的には、神への愛の告白との意味をも含むことになると思われる。

ここで、加藤信朗が本書の中で最も重要視すると受け取られる、「愛の告白の言葉」（二七四頁）がきわめて自然に思い起こされてくる。

「あなたを愛するのがなんとおそかったのでしょうか。それほどにも古い、それほどにも新しい美よ、あなたを愛するのがなんとおそかったのでしょうか」Sero te amaui, pulchritudo tam antiqua et tam noua, sero te amaui!（一〇・二七・三八）。

そしてまた、新たに conscientia を「思い」と訳し、また、あえて確信を持って cor を「心の奥底」と訳し直す二八八―二八九頁も。

「主よ、わたしは揺れ動く思いによってではなく、確固とした思いによって、あなたを愛しています。あなたはわたしの心の奥底をあなたの言葉で刺し貫かれました。そこで、わたしはあなたを愛してしまいました」Non dubia, sed certa conscientia, domine, amo te. Percussisti cor meum uerbo tuo, et amaui te.（一〇・六・八）。

『告白録』のすべては、実は、この、きわめて、一人称―二人称関係的な、原初の地点から始まっているのではないであろうか。

そしてまた、常に著作の冒頭部に鋭く注目して、精緻を極める分析を加え続ける加藤信朗は、『告白録』の本論部分の中においても、テキストの中に隠された、真の出発点

を探し求めて、ついに、この地点に到達したのではないであろうか。

ここでは「わたしはあなたを愛してしまいました」amaui te と言われていて、決して「わたしは神を愛してしまいました」amaui deum とは言われていないことに、私たちは十分注意すべきである。

私が誰かと出会うことができる原初の場面において、私はあなたとだけ出会うことができる。

「私が彼と出会った」と言えるのは、私がすでに出会いの場面から離れ、過去の出会いを遠くに見つめているときであろう。

アウグスティヌスは、ここで、まさに、神との出会いの原初の経験の畏れと喜びの中で語っていると言えよう。

すると、加藤信朗のきわめて重要な問題提起が思い起こされてくる。

『告白録』第一巻第一章において、「「神」deus という言葉が出てきていないのは、驚くべきことだと思います」(三五頁)。

これはなぜなのか。

「私は神を愛する」ではなく、「私はあなたを愛する」。

『告白録』第一〇巻において、アウグスティヌスの「生」の一切を支える、根源的な出発点としての出来事が語られている。

第一巻第一章のテキストもまた、よくよく耳を澄ませつつ読み返してみれば、その出来事の視点から語られている、と聞こえてこないだろうか。

「わたしはあなたを愛してしまいました」(一〇・六・八)との言葉は、遠い日の過去の出来事を物語る言葉ではなく(二九〇頁)、いつもアウグスティヌスの「心の奥底」cor にあり、『告白録』の中でつむぎだされるすべての言葉に対して生き生きとした色彩と躍動を与える生命の言葉であったと思う。

第一巻第一章で「アウグスティヌスの心の奥底からほとばしり出て」(二九頁)「叫びとなって湧き上がって」(三一頁)「虚空を貫いて」(三〇頁)響き渡る、比類のない珠玉のような、あたかも、はるかな叫びの結晶のような言葉の数々に対しても、それはつきることのない命の輝きを与えているように見える。

最後に一・五・六の一文に関して、一言付け加えたい。

「わたしの魂の家はあなたが来ていただくためには狭いものです。どうぞ、あなたがそれを広くしてください」Angusta est domus animae meae, quo uenias ad eam: dilatetur abs te.（七九頁）。

この意味深い言葉は、「あなた」へと向かう「私」の根本的な方向性や運動性の根底に潜む、「あなた」からの「私」への方向性や運動性という文脈で語られていることに私たちは十分注意しなければならない。

その反対の方向性や運動性の文脈において、かつて、第二段落において、こう語られていた。

「わたしたちの心（cor nostrum）は、あなたの内にあって憩う（requiescat in te）まで、休らうことがありません（inquietum）」。

この一・五・六の一文についての深い解釈が示されている七九頁において、加藤信朗がハイデガーの「ひらけ」Offenheit の説に言及していることに触発されて、私は Angst を思い浮かべる。

ドイツ語の Angst や eng は恐らくラテン語の angustia に語源を求められるだろう。Albert Blaise: Dictionnaire Latin-Français des Auteures Chrétiens, 1954. によると、angustia の意味は以下のようである。「収縮」「限られた空間」「狭さ」「広がりの不足」「制約」「必要」「逼迫」「困窮」「狭苦しい所に押し込める働き」「圧迫する、悩ませる働き」。そして「制約」の用例の所に、アウグスティヌス『自由意志論』二・一四・三七からの引用がなされている。nullae sunt angustiae, nullus in ea defectus=il n'y a en ellee (dans la possesion de la vérité, opp. aux terrestres) aucune restriction, aucun manque.

ブレーズによる上記の引用とは別に、アウグスティヌスの『告白録』一・五・六のテキストが最も注意を引く。

はたして、次のように言えるだろうか。

アウグスティヌスの場合、angusta; angustia は神の人への到来を妨げる働きをなすのに対して、inquietum = Unruhe はというと、まさに人の神を求める原動力の働きをなす可能性も持つ、と。